

学生の意欲について

保育児童学部教授
修士（教育学） 後藤泰博

今回は、最初に中島総長によるご講話があり、その後、通常の授業が行われた。そのお話の中で、「人種のるつぼ」と称される日本とは文化や人種の大きく異なるアメリカにおいて生活するだけでも大変なのに、現地の大学ではなく、大学院で学ぼうと決意された事、大学院で入学段階からとてご苦労なされた事、苦手だった数学をどのように克服したのかなどについて、受験生の意欲や勉強方法に絡めて具体的な考え方を示された。

「できなかった子（生徒）をできる子（学生）にするのが教育」という本学のモットーは、この中島総長の貴重な体験が基になって考えられたものであるということが本当に良く理解できた。それを理解していないと、この言葉は、見方によっては、教師が上から目線に立って学生に「君たちは学力が低いから教えてやるんだぞ」という意味にも曲解されかねない。日本で「優秀」とされる日本の大学から留学してきた学生が次々と脱落していく中、なぜ、当時三十代後半の専門学校の経営者である中島総長が大学院での数々の不平等や理不尽な扱いをはねのけて博士課程を修了し、見事、アメリカの教育学博士の称号を勝ち得たのか、お話をお聞きして、感動もしたし、勇気もいただいた。留学を志す学生に是非聞かせたいと思うような内容であった。この貴重な体験談をそのままにしているのはもったいないので、是非、書物にして本学の教職員だけでなく、全国の留学を志している学生全体に共有したいと感じた。国際化の必要性が年々増加する現代社会なのにもかかわらず、残念ながら最近は海外への留学希望者数が減少しているようなので、その意味からも必須な内容であると感じた。

さて、今回の講話で中島総長がお話された「受験の核心は、意欲と努力に他ならない」という言葉と、伊東学部長がお話された「学生の心に火をつける教師」という言葉が強く心に残った。国家試験に受からなければ資格の取れない他学部と違い、私の所属する保育児童学部では、卒業さえすれば保育士資格が取得でき、保育士不足の現状から敢えて公務員保育士を目指す学生が少なく、また、女子学生が多く、地元志向が強いという実情があり、それを変えていかないと公務員保育士受験者数自体が増加しないというジレンマを抱えている。実際、少数ながら公務員保育士の受験を目指す学生はその多くが合格しており、受験者数と合格者数の割合からすればかなりの高率になる。しかし、教育学部の女子学生の意識と大きく異なり、保育の多くの女子学生は将来、自分の子供ができたなら仕事を辞めて子育てに専念したいという漠然とした判断をしており、どうせ仕事を辞めるなら苦労して公務員を受ける必要はないと考えている場合も意外と多い。その考えを尊重しつつも、将来のことは分からないが、公務員保育士受験はチャレンジであり、人生1回ぐらいチャレンジしてもいいのではないかと私は学生を説得し続けている。今回は残念ながら個別に学生たちと話す機会がなかったのが悔やまれる。来年度は、しっかりと計画を立てて説得していきたい。